

特集号「社会科授業研究における質的研究－理論と実践から－」

日本社会科教育学会編集委員会

授業研究における質的研究とは、一般に、授業場面における個や集団の学びや思考の過程、獲得した認識の意味といった学習者や教師の内面的営みを、さまざまな調査・観察手法を用いて説明することを目的とした研究であるといわれている。具体的には、授業観察者あるいは授業実践者が、さまざまな場面で収集した観察記録や授業のプロトコル、インタビュー等の成果（事実）を総合して、学習者の学びの実態を解釈していくことになる。近年、質的研究は、得られた事実を数値化することにより客観的に授業を分析するという量的研究だけでは読み取れない、学習者の複雑な内面的な営みを読み解いていく研究分野として注目を集めている。

従来、社会科授業研究は、社会科授業は「どうあるべきか」をめぐって展開されることが多かった。それに対して、質的研究がめざすのは、子どもたちが「どう学んだのか」という学びの実態から、授業を逆照射しようとするものである。

社会科授業研究の分野では、授業の実際を録音・録画して記録に残し、さらに詳細なプロトコルの作成、ワークシートやノートの記述分析等を行うことにより、子どもたちの授業場面における思考や判断の有り様を読み解くという授業分析手法が広く用いられてきた。こうした授業分析手法は質的研究における分析手法ときわめて近似しており、社会科授業研究は多くの優れた質的研究の成果を蓄積してきたと言えるかも知れない。

しかしながら、質的研究をめぐっては、その定義や研究手法は多様であり、必ずしも統一した見解が存在する訳ではない。また、授業という場における学習者あるいは教師の内面的な意味世界を研究対象としているだけに、その客観性や一般性、代表性の面において、常に批判にさらされてきた。

本特集号では、従来の社会科授業研究の研究成果を踏まえ、授業分析における質的研究の可能性を、理論と実践の両面から幅広く検討したいと考えている。